皆様の課題をICTで解決する
DAiKO
http://www.daikodenshi.jp
FUJITSU パートナー
大興電子通信株式会社

CHIBA UNIVERSITY PRESS 江戸川大学ユニバーシティプレス

大学生記者が編集

共に支えて生きる

広がるクラウドファンディング

自身も線維筋痛症のHIROさん
移動型難病カフェに挑戦

新しい資金集めの手段としてクラウドファンディングが注目を集めている。インターネット上で企画と必要金額を公開し、賛同した第三者が支援をするという仕組み。個人、企業問わず老若男女が、商品開発やイベント開催などの目的でプロジェクトに挑戦している。資金集めだけが目的でなく、志からクラウドファンディングを行っている人たちもいる。

難病と闘いながら、移動型の難病カフェに挑戦するHIROさん

「同じ境遇の人を支えたい」。そう話すのは、線維筋痛症という全身に慢性的な痛みを感じる難病を抱えるアーティスト、HIROさん（仮名・40歳）。クラウドファンディングを使い、移動型の難病カフェを作るプロジェクトに挑戦している。

難病がきっかけで家族がバラバラになり、金銭面で頼れる人がいないため今年3月6日からクラウドファンディングを始めた。4月16日時点で目標金額の81%に達した。

難病カフェは、難病を抱えた人たちが病名を問わずにコミュニケーションできる場所である。HIROさんが作りたいと思っているのは、寝たきりなどの理由で外出が困難な人たちに会いに行ける移動型の難病カフェだ。

「繊維筋痛症は、数値に現れない難病なので、理解されにくい。孤独だと思って自殺してしまった友人もいる」。実は、HIROさんも自殺を考えたことがある。同じ悲しみ、苦しみの中にいる人を、自分だから支えられるのではないか。そんな思いからクラウドファンディングを始めた。

プロジェクトが順調に進む中、2019年3月27日に大腸ガンの宣告を受けた。立ち直れなくなりそうだったHIROさんを支えたのは、クラウドファンディングだった。集まった支援額と応援メッセージを見て、応援してくれる人のためにもやらないといけない―と前向きな気持ちになった。「クラウドファンディングを無理して始めてよかった。ネットなのに温度を感じることができた」とHIROさん。

孤立から選んだクラウドファンディングという手段で、人の温かさに触れることができた。

（増田朱音・和田美菜海）

病気の猫も諦めない

保護活動を行うカフェオーナー・今村さん
専用シェルター設置へ

船橋市にある保護猫カフェ「ととの森」では捨てられたり、飼い主が亡くなるなどして行き場をなくした猫を保護している。

経営者の今村瞳さん(59)は保護活動を行う中で、病気の猫を保護したいができないという無念を語る人々を目の当たりにした。健康な猫と同じ環境では保護できないからだ。そこで「どうにか保護できないだろうか」という声に応えるためシェルター兼譲渡会場設立へ資金を集めるプロジェクトを立ち上げた。

勧められてクラウドファンディングでの資金調達を選んだが、開始当初は目標金額が集まる保証のないこの方法に対し心配があったという。

看板猫のふっくんをだっこする経営者の今村瞳さん＝船橋市の保護猫カフェ「ととの森」

しかしそんな不安を大きく上回る多くの支援が集まり、4月12日、プロジェクト成立条件である第一目標金額150万円を達成した。

支援者の中には、話を耳にして今村さんの元に駆け付けた里親も多くいる。彼らはさらにシェルターを必要とする人たちにも届くようにとSNSを利用し情報を拡散した。支援者自らチラシを作製しスーパーに掲載したものを見て、カフェを訪れ投資を決めた人もいた。

インターネットを通じた関係だけでなく、今村さんがカフェで築いたリアルな人との繋がりが成功の鍵になった。

シェルターを立ち上げるだけでなく、継続させていく。今村さんは自身の目標に加えて、今度は同じようなプロジェクトを持った人たちをクラウドファンディングで支援できる立場に立ちたいと語る。

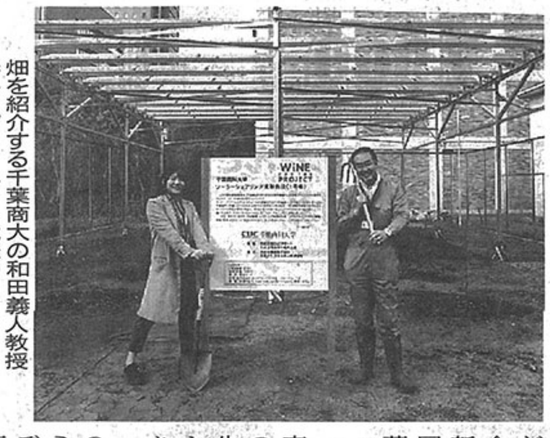
（平田みのり・平山亜優）

先輩の応援力に

千葉商大「CUC100ワインプロジェクト」
2週間で目標達成

千葉商科大学の創立100周念を記念する「CUC100ワインプロジェクト」は、学生が取り組むワイン作りを通して在学生と卒業生が「つながり」を強くした。

同プロジェクトのクラウドファンディングが今年2月1日に始まり、約2週間で目標の200万円が集まった。3月29日には第2のゴールである300万円を超える、337万9千円が集まった。


畑を紹介する千葉商大の和田義人教授（右）とプロジェクト代表の田口さくらさん＝千葉商大

そもそも資金調達の方法を決めるきっかけに、千葉商大の先輩が関係している。千葉商大を中退して大手クラウドファンディング会社「レディーフォー」に就職した鈴木竜平さん(24)のサポートを受けることで、クラウドファンディングを利用することに決めた。

鈴木さんによると、クラウドファンディングの支援者の比率というのは、3割が身内、3割が身内の知り合い、そして残りの4割が新規の支援者だという。今回、支援者のほとんどが千葉商大の卒業生や保護者だった。

ワインプロジェクトの代表である田口さくらさん(20)は、「千葉商大の卒業生は多いので、100周年というつながりで達成できたんだと思う」と語った。

本来、卒業すると先輩とのつながりは途切れてしまう。今回のクラウドファンディングは、後輩と先輩を再び強く結びつけた。

（池谷明日香・上地将英）

失敗をバネに 経験生かし再挑戦

NUIZAEMON柏本店（柏市）の店長、飯島暁史さん(42)は、地元柏市で育てた豚から革製品を作る第六次産業によって地域に貢献するためプロジェクトを立ち上げたが、プロジェクトで集まった資金は目標金額に届かず、不成立となった。

飯島さんはプロジェクトの立案からサイトへの掲載まで一人で行った。「簡単にできる、と勧められて気軽に始めたが、とても大変だった」

一方、株式会社「人と古民家」の牧野嶋彩子さん(46)は大多喜町の環境に魅力を感じ、田舎のぬくもりを感じることのできる古民家を改装、一棟貸し体験型の宿泊施設「MARUGAYATSU」を造った。

1度目のクラウドファンディングは賛同が集まらず、失敗に終わった。その経験を生かし、2度目では地元の人々がいきいきと働き、訪れた人と交流できる場を作るプロジェクト内容に変更した。その結果、目標金額を達成。その資金で納屋を改装し理想の古民家に近づくことができた。

「自分たちが作りたいものではなく、世の中のためになるものがクラウドファンディングでは成功する」。そう話した牧野嶋さんは新たな夢を実現すべく、3度目のクラウドファンディングも視野に動き出している。

いつの時代も、人々の心を動かすのは誰かのためになる行動である。クラウドファンディングは金もうけだけの手段ではない。新しい人との繋がりを作り、志を支援する新たな方法なのだ。

（後藤彩女・平山亜優）